

The Effect of Strength Factors on Efficacy of
Pre-school Teacher and Hardiness for Students of
a Nursery Teacher-Training Course

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 誠, 森本, 哲介, TAKAHASHI, Makoto メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1173

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



保育者養成課程の学生の強みに関連する要因が 保育士効力感やハーディネスに及ぼす影響

The Effect of Strength Factors on Efficacy of Pre-school Teacher and
Hardiness for Students of a Nursery Teacher-Training Course

高橋 誠・森本 哲介

TAKAHASHI, Makoto MORIMOTO, Yoshiyuki

本研究の目的は、保育者養成課程の学生を対象として、強みに関連する要因である、自己の強みの認識度 (SSK)、自己の強みの活用感 (SSU)、ならびに他者の強みに注目する傾向 (OSF) が、保育者効力感ならびにハーディネスに与える影響について探索的に検討を行うことであった。保育者養成課程に在籍する大学生96名を対象に調査を実施した。共分散構造モデリングによる解析を行った結果、SSKとOSFから保育者効力感やハーディネスに正の影響がみられた。ハーディネスから保育者効力感への影響は限定的であった。本研究の結果から、強みに関連する要因は保育者効力感やハーディネスに影響を及ぼすことが判明した。以上の結果を踏まえ、保育者養成課程の学生の保育者効力感やハーディネスを強化するために強みを基礎とした支援プログラムを開発することの重要性について議論された。

問題

統合保育の影響や保育ニーズの多様化等により、保育者を取り巻く環境は厳しさを増している。障害を抱える幼児への対処や保育ニーズが多様な環境下において、保育者には様々な背景を持つ子どもの特性を捉えつつ、自らの強みを現場の中で発揮しながら、保育に信念を持ち続けることができるような資質が求められていると思われる。多様化する保育現場で活躍できる保育者を育成するためにも、保育者養成過程からこのような資質を育むことが急務であると思われる。

保育に対する信念を保ち続けるために必要と思われる要因の一つとして、“保育者効力感”が上げられる。保育者効力感とは、“保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念”と定義される(三木・桜井, 1998)。保育者効力感とは、Bandura (1977) 提唱した自己効力感(ある行動を自らが成功裏に実行できるという信念)において、保育という限定された場面に対して示す効力感を指すものである。保育者養成過程から適切な保育者効力感を保持することは重要である。しかしながら、三木・桜井 (1998)

キーワード：保育者効力感、ハーディネス、強みの認識、強みの活用感、他者のポジティブ側面への積極的注目
Key words : Pre-school teacher efficacy, Hardiness, Strength knowledge, Strength Use, Active Focusing on Positivity

以降、教育実習の経験が保育者効力感に与える影響について検討した知見は多く見られるが、教育実習前の保育者効力感に影響する要因の検討は少ない。井上（2014）は国内で行われた保育者効力感に関する12の研究を概観したところ、保育者効力感そのものに直接的に影響を与える要因についての知見が少ないと述べている。

保育実習経験以外で保育者効力感に直接的な影響を与えつつ、さらに学生時代から身につけることが可能な特性として考えられるものに、“強みに関連する要因”が考えられる。強みとは、“人が活躍したり、最善を尽くすことを可能にさせるような特性（Wood, Linley, Maltby, Kashdan, & Hurling, 2011）”と定義されている。近年、強みに関連する様々な知見が注目されている（Lopez & Snyder, 2009）。Govindji & Linley（2007）は、“自らの全体的な強みを認識している感覚（Self-Strength Knowledge:以下、SSKとする）”、および“自分が保有している強みを日常の中で活用している感覚（Self-Strength Use:以下、SSUとする）”という概念を提唱した。SSKやSSUは、全般的な自己効力感や自尊感情（Govindji, & Linley, 2007; Proctor, Maltby, & Linley, 2011）、心理的な活力やポジティブ感情（Wood et al., 2011）との関連が示されている。SSKならびにSSUは、自己の持つ強みを自覚し、それを活用している感覚を測定しており、Bandura（1977）のいう自己効力感の情報源である自己強化に影響する要因であると考えられる。自己の強みを自覚し、日常的に活用できるものは、保育の場面において自分の強みを発揮できるという自己イメージを持ちやすいことが予想される。

強みに関するもう一つの方向性として、他

者の強みに注目する傾向に関する知見も重要である。高橋・森本（2012）は、他者の強みに積極的に注目しようとする認知傾向として“他者のポジティブ側面への注目（Others-Strength Focusing:以下、OSFとする）”を提唱した。保育者にとって、子どもの強みや良い部分を見出そうとすることは重要である。普段から子どもを含めた他者の強みや良い側面に注目しようとする傾向が高いことは、保育場面でも強みを見出すことができ、円滑な保育を行うことができるという感覚に結びつく可能性がある。このように、強みに関連する要因は、保育者効力感に大きな影響を与える可能性があると考えられる。

ところで、ストレスフルな保育の現場で活躍するために、保育者にとって必要な要素と考えられるものに、ハーディネスがあげられる。Kobasa（1979）は、厳しいストレスに曝されながらも比較的健康的に過ごすことのできる人々の性格特性に共通する特性を“ハーディネス(hardiness)”と命名した。ハーディネスは、自己の生活上の様々な場面において没入しているという傾向である“コミットメント(commitment)”，自己制御が可能という信念を持つ傾向である“コントロール(control)”，予期しない変化や驚異の可能性をプラスと捉える傾向である“チャレンジ(challenge)”の3つの構成要素から成り立っている。ハーディネスは保育者のストレスを軽減させる可能性が示されており（西坂, 2002）、保育者養成課程の学生がハーディネスを高めることは重要である。

自らの強みを認識して活用できているものは積極的に自己の可能性を追求しようとする傾向や自らを振り返ろうとする傾向が高いことが判明しており（高橋・森本・田原、

2017)、SSKやSSUは、ハーディネスにおけるチャレンジやコミットメントに影響する可能性が考えられる。一方、ハーディネスは保育者のストレスを軽減させる可能性が示されているものの(西坂、2002)、ハーディネスが保育者効力感に与える影響については検討されていない。

本研究は、保育者効力感に対して、強みに関連する要因であるSSUとSSK、OSFがどのような影響を与えるについて、各概念間での仮説モデルを構築して探索的に検討を行うことを目的とする。特に保育者養成機関に在籍し、まだ保育実習経験のない学生を対象とすることにより、実習経験の影響がない状態での検討を行うことが可能となる。さらに、強みに関連する要因がハーディネスに与える影響、ハーディネスが保育者効力感に与える影響についても合わせて検討を行う。

方法

調査時期・方法 調査は2017年6月～7月に行われた。関東圏内の大学で保育専攻の学科にて開講されている心理学の講義にて、個別記入形式の質問紙調査を実施した。本授業の受講者は保育実習経験のない2年生が中心であった。回答はいずれも無記名で行われた。調査の際に、回答は統計的に処理され、個人が特定されることはないことや回答を中断しても不利益が生じないことを口頭、紙面にて説明した。

調査対象者 大学生110名のうち、データの欠損を除いた96名(男性31名、女性65名：平均年齢19.35、 $SD=0.54$)を分析の対象とした。

調査内容 質問紙のフェイスシートは、施行目的と回答方法、ならびに対象者の属性として、性別、年齢、学年、専攻の記入欄を設け

た。さらに、以下の質問項目から構成されていた。

自己の強みの認識度(SSK) Govindji & Linley (2007)の尺度をもとに高橋・森本(2015a)が作成した日本語版Strength Knowledge Scaleの8項目を使用した。各項目について“全くあてはまらない(1点)”から“非常にあてはまる(5点)”の5段階評定で回答を求めた。

自己の強みの活用感(SSU) Govindji & Linley (2007)の尺度をもとに高橋・森本(2015b)が作成した日本語版Strength Use Scaleの14項目を使用した。各項目について“全くあてはまらない(1点)”から“非常にあてはまる(5点)”の5段階評定で回答を求めた。

他者の強みに注目する傾向(OSF) 高橋・森本(2012)が作成した、ポジティブ側面への積極的注目尺度より、“他者の強みに積極的に注目する傾向”因子7項目を用いた。各項目について“全くあてはまらない(1点)”から“非常にあてはまる(5点)”の5段階評定で回答を求めた。

保育者効力感 三木・桜井(1998)が教師効力感尺度をもとに作成した保育者効力感尺度10項目を使用した。各項目について“全くあてはまらない(1点)”から“非常にあてはまる(5点)”の5段階評定で回答を求めた。

ハーディネス 田中・桜井(2006)で用いられた大学生用ハーディネス尺度18項目を使用した。ハーディネスはKobasa(1979)の定義に基づき、コミットメント、コントロール、チャレンジという要素に分離される。因子分析の結果、概念通り3つの因子となることが確認されている。各項目について“全くあてはまらない(1点)”から“非常にあてはまる(5点)”の5段階評定で回答を求めた。

解析方法 測定されたデータについて、変数間の相関分析を行った。また、SSKとOSFの間には有意な相関があることが示されているため（森本他、2017）、多重共線性の問題を考慮し、変数間の仮説的モデルを設定したパス解析による分析を行った。解析にはIBM社のSPSS Statistics 23.0、ならびにSPSS Amos25.0を用いた。

結果

記述統計と性差の検証 尺度ごとの合計得点を算出して分析に用いた。結果をTable 1に示す。まず、各変数における合計得点の平均値、標準偏差を算出した。変数の信頼性係数を算出したところ、 α 係数は.68～.95の値であり、各変数とも以降の分析に耐えられる程度の内的整合性が認められたと考えた。続いて性差を検討するため、性別を独立変数、尺度の得点を従属変数とした対応のない t 検定

を実施した。結果、ハーディネスの下位因子であるコントロールのみ有意な性差がみられたが ($t(94) = 2.14, p < .05$)、それ以外の全ての変数で有意な性差は見られなかった。

相関分析による検討 各変数間の関連を検討するために相関分析を行った。結果をTable 2に示す。全ての変数間において、有意な正の相関がみられた。

パス解析によるモデルの検証 SSKとSSU、OSFを独立変数、保育者効力感とハーディネスの3因子を従属変数としたパスモデルを構築した。次に修正指数を参考にモデルの修正を行った。最終的に、Figure 1のモデルが最も良い適合度となり、 $\chi^2(7) = 6.64, p = .47$ 、GFI = .98、AGFI = .93、CFI = 1.00、NFI = .98、RMSEA = .00であった。ここで示すパスはすべて5%水準で統計的に有意なものである。

単方向のパスは標準化された偏回帰係数、双方向のパスは相関係数を表す。まず、SSK

Table 1 各変数の記述統計量、信頼性係数、性差の検討結果

	全体 ($n = 96$)		男性 ($n = 31$)		女性 ($n = 65$)		性差 t 値	信頼性係数 α
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)		
SSK	3.18	(0.88)	3.24	(0.81)	3.16	(0.92)	-.43 <i>n.s.</i>	.93
SSU	3.32	(0.80)	3.30	(0.76)	3.33	(0.82)	.16 <i>n.s.</i>	.95
OSF	3.61	(0.61)	3.52	(0.61)	3.65	(0.61)	1.02 <i>n.s.</i>	.82
保育者効力感	3.22	(0.62)	3.27	(0.66)	3.19	(0.60)	-.54 <i>n.s.</i>	.93
ハーディネス								
コミットメント	3.64	(0.82)	3.67	(0.76)	3.63	(0.86)	-.22 <i>n.s.</i>	.84
コントロール	3.27	(0.69)	3.06	(0.53)	3.37	(0.73)	2.14 *	.68
チャレンジ	3.06	(0.69)	2.97	(0.62)	3.09	(0.72)	.81 <i>n.s.</i>	.72

* $p < .05$

Table 2 変数間の相関係数

	2	3	4	5	6	7
1. SSK	.78***	.27**	.46***	.59***	.44***	.27**
2. SSU		.39***	.45***	.51***	.35***	.28**
3. OSF			.47***	.44***	.38***	.32***
4. 保育者効力感				.47***	.43***	.31**
5. コミットメント					.54***	.28**
6. コントロール						.38***
7. チャレンジ						

** $p < .01$, *** $p < .001$

から保育者効力感 ($\beta = .29, p < .01$)、コミットメント ($\beta = .57, p < .001$)、コントロール ($\beta = .37, p < .001$)、チャレンジ ($\beta = .20, p < .05$) に有意な正のパスが見られた。SSUから全ての従属変数への有意なパスは見られなかった。OSFからは保育者効力感 ($\beta = .32, p < .01$)、コミットメント ($\beta = .18, p < .05$)、コントロール ($\beta = .28, p < .01$)、チャレンジ ($\beta = .27, p < .01$) に有意な正のパスが見られた。SSKとSSU間 ($r = .78, p < .001$) には有意な正の強い共分散がみられ、SSKとOSF間 ($r = .27, p < .01$) には有意な正の弱い共分散が、SSUとOSF間 ($r = .39, p < .001$) は有意な正の中程度の共分散が見られた。

考察

本研究の目的は、自己の強みの認識度と活用感、ならびに他者の強みへの注目が、保育者効力感、ならびにハーディネスにどのように影響するかについて、探索的に検討する事であった。本研究ではハーディネスのコントロール因子のみ有意な性差が見られたが、他の変数では有意な性差はみられなかった。

ハーディネスのコントロール因子に関する結果については、本研究では有意な性差が認められた点を踏まえて、結果の解釈には留意が必要であると思われる。

まず本研究により、強みの認識や他者の強みへの注目といった強みに関連する要因が、保育者効力感に影響を与えることが分かり、ハーディネスから保育者効力感への影響はほとんどみられないことが判明した。学生の段階においても、自らの強みを認識できているものは、保育者としての効力感を抱きやすいたことが判明した。池田・大川 (2012) によれば、現職の保育者にとって保育者効力感に最も大きく影響する要因は“自己能力への懸念”であることが分かっている。自己の持つ能力に対して確信を持てるようになるために、学生時代から自己の強みへの認識を行うことが、将来的に保育者としての効力感を高める上でも重要な要素であると考えられる。

また、他者の強みへの注目が保育者効力感に影響を与えることも判明した。保育者は他者、つまり子どもの強みを積極的に見出そうとする傾向が高いものほど、保育者として自

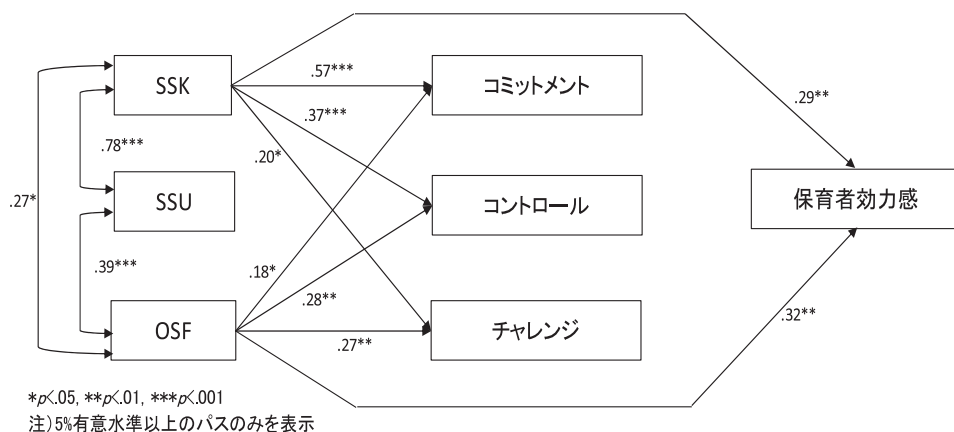


Figure 1 保育者効力感に対するパスダイアグラム

信を感じやすいと考えられる。上記の結果と合わせて考えるならば、自らの強みを認識し、他者の強みに注目することは、それぞれ保育者としての効力感を高めることが判明した。さらに、高橋・森本（2012）では、自己の強みを見出そうとするものは、他者の強みも見出そうとする傾向が高いことが分かっているが、本研究でもSSKとOSFには正の共分散が見られた。自己の強みへの注目と他者の強みへの注目は車の両輪のような関係性であり、お互いに影響し合いながら、保育者効力感という車を前に進める可能性がある。本結果は、保育者効力感を高める施策を考える上で重要な示唆を含んでいると考えられる。

次に、ハーディネスへの影響について考察する。強みの認識がハーディネスの各変数に対して最も大きな影響を与えていた。自己の強みの認識が高いものは、自己肯定感や自我同一性、社会的な同一性が高く（高橋・森本、2015a）、社会生活の中で自らの立ち位置を理解しながら生活している。そのため、自己の生活上の様々な場面において、自己と活動との間の不一致や葛藤が少なく、自己を制御したり活動に没入することが容易であると考えられる。

また、他者の強みへの注目も、ハーディネスに影響を与えていた。他者の強みへの注目しやすいものは、普段から積極的に他者の状態や状況の肯定的な面を見つけようとしていると考えられる。そのため、対人場面をストレスではなく自己制御可能な楽しい状況であると感じたり、将来的な他者からの予期しない行動などを肯定的に捉えることができるなど、精神的な余裕を持っている可能性が示唆される。

一方、強みの活用感が保育者効力感やハー

ディネスとの関連について、相関分析では有意な正の相関が見られたが、パス解析では直接的に影響しなかった。その理由としては、強みの活用感と強みの認識間の共分散が非常に強いことから、強みの活用感は間接的にそれぞれの要因に影響を及ぼしている可能性が高い。特にまだ保育実習経験のない2年生にとっては、強みを活用することよりも、自己の強みに対して認識を持つことのほうが保育者効力感等に影響しやすいことが判明したとも考えられる。今後、実習を経験し、自らの強みを保育の現場で活かすような体験を踏まえることで、強みの活用感から保育者効力感等への影響過程に変化が生まれるかについて、保育実習経験後の学生を対象とした検討が望まれる。

保育者養成機関における強みを軸とした介入プログラム実施の提言 SSKやSSUを高める介入プログラムとして、“強み（strengths）に関連した要因を高めるための介入プログラム（Strength-Based Program：SBP）”が開発されている。SBPは、SSKやSSUを高め、その結果として精神的健康や自己形成意識などの様々な要因に影響があることが示されている（森本・高橋・並木、2015；森本・高橋・渡部、2014；Seligman, Steen, Park, & Peterson, 2005）。今後、保育者としての自信や効力感を高めるためには、SBPを応用した新たなプログラムの開発を行うことが有益であると思われる。本研究の結果を踏まえるならば、プログラムに“他者に強みに注目する傾向”を高めるようなワークを付け加えることにより、自他の強みへの注目を高め合う相互作用が生じる可能性があり、それぞれが保育者効力感を高めるという効果が期待できる。今後は、実際にプログラムの開発と実施、その効果の

検討を行い、本研究で得られたモデルの検証を行うことが求められる。

なお、本研究は強みに関する要因が保育者効力感やハーディネスへの影響を探索的に検討するため、一時点での横断的調査から検討を行った。しかし、本研究で見出された影響について妥当性をさらに深めるためには、保育実習を行う3、4年生や、現場の保育士を対象とした検討を行う必要があるだろう。

引用文献

- 朝木 徹・鈴木 由美. (2009). 子どもの人間関係を育む保育実践の要因：保育者効力感と子ども観の関連について. *児童学研究：聖徳大学児童学研究紀要*, **11**, 109-119.
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological review*, **84** (2), 191.
- Govindji, R., & Linley, P. A. (2007). Strength use, self-concordance and well-being : Implications for strengths coaching and coaching psychologists. *International Coaching Psychology Review*, **2**, 143-153.
- 池田 幸代・大川 一郎. (2012). 保育士・幼稚園教諭のストレッサーが職務に対する精神状態に及ぼす影響：保育者の職務や職場環境に対する認識を媒介変数として. *発達心理学研究*, **23** (1), 23-35.
- 井上 祐子. (2014). 保育者効力感に関する研究動向と課題. *国際人間学部紀要*, **20**, 47-62.
- Kobasa, S.C. (1979). Stressful life events, personality, and health : An inquiry into hardiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1-11.
- Lopez, S. J., & Snyder, C. R. (2009). *Oxford handbook of positive psychology*. Oxford University Press.
- 三木 知子・桜井 茂男. (1998). 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. *教育心理学研究*, **46**, 203-211.
- 森本 哲介・高橋 誠・渡部 雪子. (2014). 「強み (Strengths)」を活用する介入が大学1年生の自己形成意識に与える効果. *学校メンタルヘルス*, **17**, 39-49.
- 森本 哲介・高橋 誠・並木 恵祐. (2015). 自己形成支援プログラムの有用性—高校生女子を対象とした強みの活用による介入—. *教育心理学研究*, **63**, 181-191.
- 西坂 小百合. (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響. *教育心理学研究*, **50** (3), 283-290.
- Proctor, C., Maltby, J., & Linley, P. A. (2011). Strengths use as a predictor of well-being and health-related quality of life. *Journal of Happiness Studies*, **12** (1), 153-169.
- Seligman, M. E. P., Steen, T., Park, N., & Peterson, C. (2005). Positive psychology progress : Empirical validation of interventions. *American Psychologist*, **60**, 410-421.
- 高橋 誠・森本 哲介. (2012). ポジティブ側面への積極的注目に関する研究：ポジティブ志向、主観的幸福感、ネガティブ認知、他者軽視との関連. *学校教育学研究論集*, **26**, 29-39.
- 高橋 誠・森本 哲介. (2015a). 日本語版強み認識尺度の信頼性・妥当性の検討. *パーソナリティ研究*, **24**, 170-172.
- 高橋 誠・森本 哲介. (2015b). 日本語版強み活用感尺度 (SUS) 作成と信頼性・妥当性の検討. *感情心理学研究*, **22**, 94-99.
- 高橋 誠・森本 哲介・田原 直久. (2017). 大学生における自己の強みの活用感と認識度が自己形成意識およびキャリア探索に及ぼす影響. *開智国際大学紀要*, **16**, 33-40.
- 田中 秀明・桜井 茂男. (2006). 大学生におけるハーディネスとストレッサーおよびストレス反応との関係 (人文・社会科学編). *鹿児島女子短期大学紀要*, **41**, 153-164.
- Wood, A. M., Linley, P. A., Maltby, J., Kashdan, T., & Hurling, R. (2011). Using personal and psychological strengths leads to increases in

well-being over time : A longitudinal study and the development of the strengths use questionnaire. *Personality and Individual Differences*, **50**, 15-19.